

秋津洲帝国興亡記

tiwami1018

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1945年、大日本帝国は大東亜戦争に敗北し、アメリカを始めとする連合国軍に降伏した。

だがこの降伏の裏で嘗ての先帝が、後醍醐天皇の直系の子孫に当たる者に大日本帝国の再興を命じていたのであった。

そして命じられた者の名は吉野宮 尊徳（よしのみや たかのり）。

彼ともに具する従者とともに、日本神話の始まりである淡路島へと辿り着いた。淡路島にたどり着いた尊徳一行は秋津洲帝国を建国。

秋津洲帝国は大日本帝国を再興できるのか。秋津洲帝国の興亡を描いた物語。

※これは投稿者がM i n e c r a f t軍事部でしていることを小説化しているだけです。

興亡と書いてるだけあつて軍記物語に類似しています。

M i n e c r a f t軍事部に出てくる国家は出てきません。また軍事部にて行っている戦争などとは関係性が無いです。

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・国家とは一切関係ありません。

目次

プロローグ 勅命	1
第一章 独立	
第一話 始まりの島	5

プロローグ 勅命

—1945年8月15日—

暑い真夏の昼下がりに

「朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ、茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク：然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス：」

このある天皇のラジオによる玉音放送にて大東亜戦争及び第二次世界大戦は終結を迎えた。

日本は負けたのである。

軍部の暴走、大政翼賛会の暴走、軍人の政権掌握、陸海軍の確執、大艦巨砲主義への執着等々いろいろな敗因があるが、私にはどうでもいいのだ。

私は今（1945年8月16日）、宮城に居る。なぜなら私は今上陛下にご召集がかかったのだ。

なぜかは分からない。

そして私の名は吉野宮 尊徳（よしのみや たかのり）。皇紀で言えば2570年、和暦で言えば明治43年、西暦で言えば1910年生まれである。

私の苗字は宮家と同じなのである。なぜならば後醍醐院、諱は尊治（たかはる）の直系の子孫であるからだ。だが、それももう今となれば遠い昔の話である。そのような私に陛下は何の用事があるのだろうか。

私にとっては、皇族の子孫だとかはどうでもいいのだ。暮らしも格段と裕福でも極端に貧困でもなかった。普通の暮らしであった。違うのは吉野に家があり、河内の天野町に別荘があるくらいだ。それでも格別贅沢していたわけでもない。勉学に関しては、家がしっかりしており、西代小学校（今の河内長野市立長野小学校）から第三高等学校大（今の京都大学及び岡山大学）予科へ、そして京都帝国大学（今の京都大学）の法学部へ進学した。

学力だけの人間に何のご用事があるのか。

ただ、血縁絡みでの案件だとは感づいている。

すると、猫背で中年の男性が出てきた。この方こそが今上陛下であるのだろうか。

戦時下、開戦前はあれほど神だと学校で崇められてきたのだが、どう見ても至つて普通の人間である。

すると

「朕は……いや、僕は君に用があつてこちらへ呼んだのです。あなたは承知の通り、僕の遠い血縁関係に当たります。探すのに苦労しましたよ」

と陛下は少し笑顔を浮かべながら呟いた。続いて顔を険しくして

「君には大日本帝国をもう一度作り直していただきたいと思つている。」

え……何故そのような大命を私に

「君はこれでも一介の宮家だ。僕はもう連合国によつて傀儡になるか戦争責任者として処刑されざるを得ないだろう。他の宮家もほとんど臣籍降下となつてしまふ。あなたしか居ないんだ。」

と頭を下げられた陛下が頭を下げるとなると相当なことだろう。

「頭をお下げにならないでください。分かりました。でもいつかあなたと対峙する日が訪れます。それを如何なさいますでしょうか。」

と私が問うと、

「その時は上手に僕を君の宮家の分家として取り込んでください。」

と仰せになった。なんと恐れ多いことだろうか。

「わ、わかりました」

私は戸惑いつつ了解した。

すると陛下は

「しかし、無一文で勅命のみで貴方を故郷から離すわけには行かない。僕からの餞別だよ。それから淡路島へ向かってくれ。大日本帝国の再興をよろしく頼むよ。」

私は餞別として皇族の私財のほんの一部の60億円（現在にすれば約1000億円）と従者（侍従長1人、軍人3人、政治家3人）を預かった。

また天皇であることを示す三種の神器（うち八咫鏡と草薙剣は形代）を伊勢神宮、熱田神宮で身を清めてから、陛下から手渡された。

そして日本神話と日本列島始まりの地である淡路島へと向かうこととなった。

第一章く独立く

第一話 始まりの島

私たちは、陛下の勅命を受けてから数日後、淡路島へ向かった。

淡路島は日本神話で日本列島の始まりとされている。「古事記」などで『国産み』として紹介されており、イザナギとイザナミが身体を重ねて「淤能碁呂島」おのしろじま産んで神殿を建てた。淤能碁呂島で産んだ初めての島がこの淡路島だ。（ただし淤能碁呂島が淡路島等の諸説あり）

昔は淡路洲と呼称していたが、時代が進むに連れて「洲」から「島」へ変わった。

さて、私は陛下から三種の神器と餞別として資金と従者を預かった。従者の方は4人。政治、経済、軍事のエキスパートである。政治と経済は九条響くじょうひびき。彼は若干54歳と若い。公家出身の人間。小さい頃から政治を学んでおり、34歳で政界へ携わった。それまでは経済界の方で働いていたらしい。軍事は山本兵太やまもとへいたと新田義家にったよしえである。

兵太は海軍の人間で、かの有名な聯合艦隊司令長官を親戚に持つらしい。元佐官で最終階級は少佐でい号潜水艦の艦長を務めた。

義家は陸軍で、尉官であつた。最終階級は三尉で陸軍航空隊で零式戦闘機のパイロットを務めた。

お互い陸海軍同士の確執で仲が悪いと思つていたが、陸軍とあまりにも無縁な潜水艦で働いていた兵太と、何かと海軍をそばで見て羨望していた義家は気が合つた。

従者はこれだけが他にも何人か居る。私の家族である娘と息子、妻。そして代々私の家に仕えている楠木の一族だ。なので従者など引き連れている者は少ないどころかとても多いのである。若干10名で淡路島へ向かつた。

更に終戦後まもないので、淡路島までの連絡船の乗り場までの汽車が無い。(そもそも連絡船が動いているかどうかも怪しいのであるが。)空襲で全部やられて止まつてしまつている。途中までは近鉄線を乗り継いで大阪市の近くまでは来たもののやはり、空襲の影響で市内からは殆どの省線と電車が止まつており、乗れない。ここからは歩いていくこととなつた。焼夷弾によつて焼かれた有機物の焦げ臭い匂いで、色々なものが焼けつくされているので匂いが混ざり合い胸糞悪い。更には焼け焦げた家々、工場、そして線路だけ残された駅、はぐれた家族を探す者、行く宛もなく野宿をする者もいた。極めつけにこの人の形をした炭が転がつている。この炭は完全に角になつていては無く、腹や背だけが人の肌をしていたりする。また赤子を背負つた者なら、背負つた背中が真っ白であつたりする。だがそれもそれで気味が悪い。更に上を向いた炭は、眼球

が溶けてしまっているの目にも穴が空いており、甚だ悲惨なのである。このようなものたちを子供らに見せたくなかつたが、ゆく道がそこぐらいしか無かつたので勘弁して欲しい。まあ、この姉弟らはまだ国民学校へ入学するより前の非常に幼い子供であるので、何も覚えていないで欲しい。

更に歩くと神戸へたどり着いた。神戸は神戸でこれまた悲惨な光景である。家を失つた人間が神戸の駅で横たわつて寝ている。中には栄養失調で死んだのだろうか、力尽きて死んだものも居る。すると駅員が出てきて、リアカーに乗せて死体たちを運んでいった。近くで焼くのであろうか。その死体の中には中学校の生徒も居た。ある程度裕福な家庭であつても、この惨状だ。都会はやはり米軍によく狙われる。だが米軍も米軍で趣味が悪い。全くの関係のない一般市民を爆弾で燃やしたり爆風で殺す。ただ重い物を落とすだけの単純作業で、何百人何千人と殺せる。非常に趣味の悪い国だ。

また更に歩くと今度は闇市に着いた。闇市では人の行き交いがある。だが活気がないのである。ある女が野菜を売っている。そこで聞くことにした。

「おい、そこのご婦人。なんで露天市であるのに活気が無いのだ。」

と聞いてみた。すると、

「此処には戦勝国と称する朝鮮人が取り仕切つており、売上だのを奪つていくのです。更には憲兵を装つたり、陸軍の格好をした朝鮮人が検閲だとか言つて荒らしに来るので

す。

「

と言った。朝鮮人は関東での震災の時に、窃盗や強盗、強姦や殺人、放火などを繰り返していたと聞いたが、戦争が終われば戦勝国だのと称しこの有様だ。

すると、声を荒げて複数の男がやってきた。この軍刀、この制帽どう見ても憲兵であつた。だが日本語がおぼつかない。もしかやと思つたが、朝鮮人であつた。

「おい女ア！貴様ア！コメを持つているね!！」

「持つていません!！」

「貴様は嘘をつく!持つてるんだ!！」

既に日本語がおかしい。取り敢えず道の邪魔になるので片付けることにした。

「おいそこの朝鮮人!！」

「おい、今なんて言つたんだ!貴様ア!！」

「朝鮮人といつたんだ。『ちようせんじん』とな日本語わかるか?」

「貴様ア!私を愚弄する。殺す!！」

すると朝鮮人が軍刀を鞘から抜き取り私に斬りかかろうとした。あいにくその日本刀は戦線で使われていたのだろうか、刃こぼれがひどく更には血がサビへと変わっており、日本刀とは言いがたい者へ変わっていた。

そして私は義家にハンドサインを送った。すると義家は懐から南部銃を取り出し「パン！と胸を二発撃った。男は即死。他の朝鮮人も殺そうとしたが一目散に逃げていった。

他の話を聞くと、復員兵や野宿の者達にヒロポンや酒を売っているそうだが、これまた高価でヒロポンも劣悪なもので、酒に限っては殆どが「飲んだら死ぬ」か「運が良くて盲めくら」なのである。昔の数々の悪行で品がなかったが、今ではただの蛮族へ成り下がっている。嘗ての三韓時代のような崇高な朝鮮人ではないのだ。

そして日が暮れても歩き倒して明石へとたどり着いた。宿がないので野宿と行きたいところだが、妻子が居るので近くの民家に賃料を払い泊めさせていただいた。

皆足がもう動かないくらいに歩いたからか、すぐに寝てしまった。

翌朝、日が出る前に出発し、明石港に着いた。だが、機雷等の影響で連絡船が動いていない。すると兵太が大阪警備府に連絡をしてくれて、停泊中の哨戒艇を寄越してくれそうだと。

1, 2時間後に哨戒艇がやってきてくれて、淡路島の岩屋港へ向かった。

私が生きている時に大阪や奈良は統治出来そうにもない。もう私は故郷へ戻る事が出来やしないと悟り、涙を浮かべた。しかし、私は陛下直々の大命を引き受けたのだから、やるからにはしつかり果たさなければならぬ。

1時間もかからないうちに岩屋港へ着いた。岩屋港には軍人が待つていた。

「よくぞ()無事でここまでいらつしやいました。私達は貴方にお仕えする軍人です。私の名は足利尊氣^{たかおき}。陸軍の者で最終階級は大佐。最後は歩兵連隊の連隊長を務めておりました。天皇陛下のご勅命で我々は一足お先に、こちらへいらしてました。」

尊氣この軍人らの代表者らしい。ここに来た軍人は3、400人程度らしい。労働力としても当分は使つて欲しいとのことだ。軍人らが用意した車に乗り込み、案内された摩耶山の拠点へ向かった。

摩耶山へたどり着き、そこには立派とは言いがたいが新しく丈夫な小屋が多く建つていた。

すると尊氣が

「当分はここで、今後の国家などのことを決めたり、暮らして頂きます。」

と言つた。ここでするとなると中々涼しいのでちょうどいい。

井戸もあるし、なんでもあるのだ。

今日はずっと島をあちこち回つた。大阪や神戸とは違い、空襲がなくとても静かであつた。だが、戦争に関するものは色々ある。特攻訓練飛行場や由良要塞。他にも砲台なども。さすが本土決戦を控えていた国である。

翌日は今後の会議であつた。軍人ばかりの中、数少ない政治経済の人間は重要あつ

た。

私は

「取り敢えずはこの島の住民を国民として取り入れる。そうでもしないと徴兵すら出来ないし、税収がない。」

と言った。

すると九条が

「では我々が説得してまいります。法や制度はその後からです。」

と言つてこれだけで会議が終了した。

早かつたが、皆、まとまりがあるのでなんとかなりそうだ。

私としてはまずは四国の統一を目指す。

そのためにも、兵器が必要だ。それをどこから獲得しなければならぬ。

兵器の供給国を探すのが課題である。